

■学校経営のポイント

子どもによる“教師理解”

喜名 朝博

児童生徒理解は、教師の専門性が最も発揮される領域である。学習指導も生徒指導も、児童生徒理解から始まる。授業中の子どもたちのちょっとした目の動きから、学習内容の理解の程度までも予想できる、それが教師の専門性の高さである。

子どもたちの全てを捉えていくのが、児童生徒理解であるが、逆に教師も子どもたちの理解の対象とされていることはあまり意識されていない。

朝の第一声で判断される

「今日は機嫌がよさそうだ」「今日は静かにしておこう」など、朝の第一声で担任の心の状況を読みとっている学級がある。一方、いつも元気な担任の学級では、挨拶を交わした瞬間に「今日もがんばろう」と子どもたちに魔法がかかる。教師も人間であるから、常に同じテンションでいることは難しいことだ。しかし、子どもたちに余計な忖度をさせないのも大人としての成熟、教師としての力量である。

教師を忖度する子どもたち

教師の発問に対し、子どもたちが挙手して発表する。教師は一つ一つの発言を価値付けながら次々と指名を繰り返す。そして、自分が期待する反応が出ると大げさに価値付けて指名を止める。こんな授業を繰り返していると子どもたちは教師を忖度し、どんな発言を期待しているのかを考えるようになる。自らの考えではなく、教師の意図を想像するようでは「主体的・対話的で深い学び」からはほど遠い。

一方、子どもたちに自由に発言させ、子ども同士の対話を重視している学級では、教師はファシリテーターに徹している。当然、後者の方が教師としての力量が求められる。子どもたちに気を遣わせるような授業が、無意識の同調圧力を生んでいることに注意しなければならない。

長崎県教育委員会の取組

長崎県教委は本年、県内の子どもたちを対象に「長崎県の学校・教育に関する子どもアンケート」を実施した(右QR参照)。こども基本法11条の趣旨に基づき、こども施策に当事者である子どもたちの意見を反映させるものである。注目すべきは「理想の先生はどんな先生ですか? どんな先生に教わりたいですか?」という設問の結果である。小中高それぞれのトップは「授業の教え方が分かりやすい」(小:65%、中:73%、高:70%)であった。

子どもたちは誰もが、分かりたい、できるようになりたいと思っている。裏返せば、子どもたちの教師理解は「授業がうまいか否か」という判断である。子どもたちはこれまでに会った教師の授業力を格付けしているのだ。大学では授業評価アンケート等によるFD活動が定着しているが、小・中学校においても、授業にかかわる子どもたちの声を聴くべきである。それが、こども基本法の趣旨を体現することにもなる。

「この教師になら相談できる」

問題行動調査での「いじめの発見のきっかけ」として「本人からの訴え」の構成比率が小・中学校ともに前回よりも微増した。子どもたちが自ら訴えられる環境ができたということであり、教師に話しやすくなったとも考えられる。困ったことがあったとき、何か相談したいとき、「この教師なら大丈夫」と思ってくれているのか、この担任ではあてにならないと思われているのか、子どもたちは常に評価している。子どもたちの話をしっかり聞き、意見を尊重してくれる教師を望んでいる。子どもたちに寄り添い、共に考えてくれる教師が必要とされている。

子どもたちは教師としての自分をどう見ているのか、勇気を出して聞いてみよう。

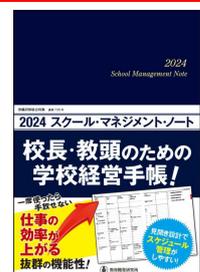
(きな・ともひろ=国士館大学教授/全国連合小学校長会顧問)



●校長・教頭のための学校経営手帳!《11/21発売、予約受付中!》

2024 スクール・マネジメント・ノート

教育開発研究所【編集】 A5変形判/定価2,750円



■研修誌・図書の小社への直接のお申込みは、小社HP <https://www.kyouiku-kaihatu.co.jp>をご利用ください。